

鼓の音は勝利の大雨（協同組合通信/風雪弾） 14.11.14

上総介織田信長は、戦国時代が生んだ軍事、外交、文化、経済など広範な分野の天才だ。後に続く秀吉と家康も甲乙つけがたいが、決定的な違いの1つは、芸能の才を身につけそれが様になっていた事にある。

我が国の戦史上、桶狭間の戦いを知らない者はいないだろう。

気象の面からも大変興味深く短い戦であった。

永禄3年（1560年）5月19日は、今の暦では6月29日頃だ。

この時期、まさに梅雨の最盛期に相当する。配下の太田牛一が著した信長公記等の資料によると、桶狭間の戦い前から当日の午前中までは、とても暑い1日であったようだ。それは、敵将今川義元が出陣に際して、落馬し輿に乗ってゆっくりと行軍したにも関わらず、汗を拭い拭いしていたとされていることで知れる。

即ち、はるか南海上の梅雨前線が徐々に北上を始め、梅雨休みの晴天であるが、むしむしした南寄りの風が吹き出していたと推測する。

幸若舞いを嗜んでいた戦の天才信長は、18日の戦評定で籠城を主張する宿老等の意見を黙って聞き流し、特に下知することはなかった。

この時まだ27歳の信長は、敦盛を3度も舞ったという。良く知られている「人間50年下天のうちにくらぶれば…」を謡いながら、いつもと較べて鼓の音が高く響きが速い事に気がつき、その訳を必死に考えていた。仮眠をとりつつ、戦況報告を聞きながらふと閃めいた。

生活の全てを軍事に集中していた若き信長は、湿り気を帯びてきた空気で鼓の音が普段より速く伝わる事を、大雨が降る兆しと予想したのだ。これまさに千載一遇のチャンスなり。側近にもその訳を告げず、急ぎ湯漬けを食し、一騎駆けで清洲城を飛び出した。後を追う騎馬は徐々に増え、熱田神宮にたどり着いた夜明頃には、千人余りの精鋭が集結。社では地元の塩炊きの棟梁を呼び寄せ意見を聞き、天気の流れを確信。やがて、義元が桶狭間に休息中の報が入るやわき目も振らず急襲した。途中で天気急変、大雷雨（熱界雷）の天恵で軍馬の音も消され、敵の知ることはなかった。かくて無勢の信長が、多勢を誇る義元をパニックにして討ち取った。信長の奇襲はこの1回。

（ 気象情報システム株式会社 高津敏 ）